

真 説「高 熱 隧 道」

清水 弘

ま え が き

黒部峡谷では、方言名称で「ハウ」と呼ばれる信じ難いような猛威を振るう雪崩が折々発生するが、このことは必ずしも広く知られてはいなかった。その猛威とは、ハウはある条件下で「なだれ風」とか「爆風」(avalanche blast)と呼ばれる高速気流を発射し、発射された高速気流が予想外の場所で災害をひきおこすことを指す。この種の災害は、ヨーロッパ・アルプス山麓では古くから記録があり、ロッキー山脈、ヒマラヤなどでもその事例が伝えられている。また鈴木牧之はその著書「北越雪譜」に、「ホフラ(ハウ)と言うは雪崩に似て非なるものなり……」と、その猛威を記述している。この化物のような雪崩の存在は本来、冬山の猟師とか、ある限られた地域に棲む人たちにしか知られていなかったが、黒部川の電源開発工事は人間とハウとの接点を急激に増大させた。

吉村昭の小説「高熱隧道」は、黒部川第三発電所の建設工事に題材をとった作品である。内容的には、高熱地帯のトンネル掘削工事と、ハウによる雪崩災害の二本柱からなっているが、つぎつぎに登場する超常識的な出来事の記述には驚嘆のほかない。この作品には吉村氏の他の作品と同じく「記録文学」の名が冠せられている。

著者は、黒部峡谷におけるハウの観測を通じて、当時の雪崩事故の生存者・関係者の証言の信頼性、小説「高熱隧道」の災害資料としての真実性、当時の新聞報道の信憑性などを考察した。

1. 黒部のハウなだれの研究

後立山から、黒部の谷の深い切れ込みを隔てて聳え立つ剣岳の甲冑のような威容を望み、(いつの日か、黒部を越えて剣へ……)と、大袈裟に言えば心に誓ったのは、終戦直後の飢餓時代だった。それが、剣に登ったのはそれから16年後であり、黒部に足を踏み入れたのは実に20年の後になった。

私の剣岳登山は昭和 38 年のいわゆるサンパチ豪雪後の積雪調査を利用しての遊びだったが、黒部の方は当時富山大学におられた小笠原和夫先生のお誘いによるものだった。吉村昭の著作「高然隧道」に登場する笠原教授は小笠原先生がモデルであるが、先生は古武士の風格を備えられた方で、常に先頭に立って号令をかけることが好きだった。

あとから思えば、先生は我々北大グループを黒部のホウ(強力な雪崩風が発生する高速雪崩)の研究にひっぱりこもうと考えて居られたふしがある。我々も、喜び勇んでこのお誘いに乗った。富山大学の中川先生は物性物理学からホウ研究の地元後継者に転進されたが、これも小笠原先生の構想であったようである。そして、富山大理学部物理教室と北大低温研雪害部門の合同グループが雪崩研究のために黒部の谷に本格的に足を踏み入れたのは昭和 46 年(1971) 秋、札幌オリンピックの前年だった。

「高然隧道」はこの時始めて読んだが、一読してその面白さに引き込まれ、その後何回(何十回)も読み返すことになった。阿曾原=仙人谷間のトンネルの異常な高熱もさることながら、オリオ谷、志合谷、阿曾原谷の雪崩事故の異様さに二驚、三驚し、そのようなバケモノとこれから取り組もうとしていることに緊張と興奮を覚えた。

最初の冬を迎えるとき、まずどこから手をつけようかと考えた挙句、ホウが本当に此处にやってくるか、どうか?もし来るならば、どの方向から、どんな力で襲来するのか?を偵察することにした。そして志合谷右岸の崖縁にある小さな鉄筋コンクリートの宿舎跡屋上に H 型鋼で高さ 3 m の観測櫓(やぐら)を 2 基構築し、それや付近のコンクリート壁などあちこちに圧痕式加重計をとりつけた。

ところが、この工事を委託された施工業者が設計図を読みちがえたのか、櫓の正面を設計図よりも約 45 度右向きに造ってしまった。結果的にはこのマチガイが、翌春予想外の情報を与えてくれたから面白い。

最初の冬が明けた五月、志合谷に入った我々は宿舎跡に襲来したホウの明確な足跡を見た。観測櫓の 15 cm の H 型鋼の上部ビームが 2 基とも揃って、その支点からアメ細工のように曲げられていた(図 1)。調べてみると 2 本の上部ビームの曲がり方は平行であり、その方向は宿舎の上流約 100 m の志合谷屈曲点付近から何か巨大な力が飛び出して、真っすぐこの櫓にぶつかって来た形だった。しかも屈曲点と宿舎跡の間は深い志合谷の落ち込みがあって、この怪力は、屈曲点から宿舎跡まで空中を飛んで来たように思えた。更に、怪力の飛び去った方向を見通して見ると、それは足元から切れ落ちた深さ 40 m の志合谷をほぼ直角に横断する形になって居た。その延長線上には宿舎と略々同じ高さに対岸尾根があり、その背後には奥鐘山西壁の大岩壁がのしかかるように聳えたっていた(図 2)。

「宿舎はあの尾根の三本松をぶち切って、600 m 向こうの奥鐘山の岩壁まで飛んでいったのだ

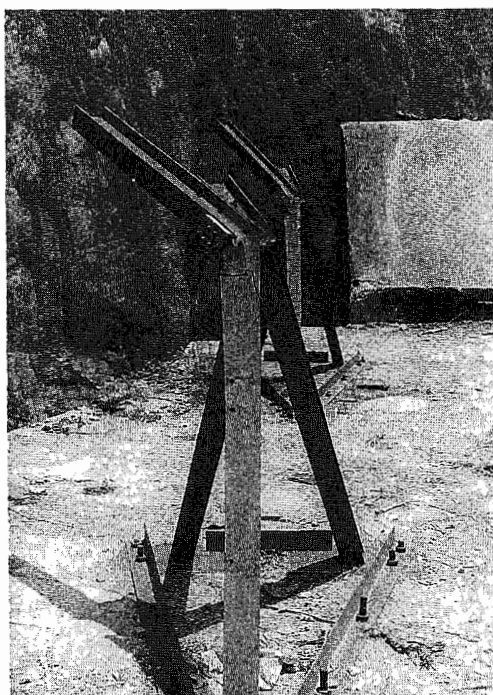
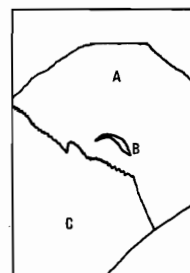


図1 ホウによる観測櫓の撓屈（15 cm H 型钢）。
背後は奥鐘山西壁南端。
（昭和 47 年 5 月：志合谷宿舎跡）



図2 志合谷宿舎跡から東望。A：奥鐘山西壁，
B：眉毛のハング
（逆層亀裂），C：対
岸尾根。志合谷はC
の手前を右方に流下
し，黒部川はAとC
の間を左方（北）に
流れている。



……」

と，小笠原先生が声を張り上げて説明されたお話や，古村昭の「高熱隧道」の記述と方向的に一致するこの簡単な観測事実に出会った時，なにか慄然とするような感動があった。

やはりホウはこの場所に来たのである。圧痕式加重計の最大値は 47 t/m^2 の加重を記録していた。もし櫓が設計通りの方向を向いて作られていたら，強度的に上部ビームは曲げられなかった計算になり，従ってホウの運動方向についての情報が得られたのはもっと後になった訳である。僥倖はこんな風に訪れることもある……と思った。

我々のホウの観測はこんな調子で始まり，年を追って拡張されて行った。突発現象記録装置（遅延回路付データレコーダー）が導入されて雪崩の衝撃圧力の無人自動記録が可能になった

かと思うと、肝心のセンサー（高さ3m）が豪雪で埋まってデータがとれなかったり、無駄かもしれないながら、センサー一台の付近を除雪して下山した翌朝、2時間半の間に3つの異なった型のホウの衝撃圧力波形が美事に記録されていたりした。雪崩が、映像記録用の8ミリカメラの遠隔スイッチ（谷を横断して張ったワイヤー）の下をくぐりぬけてカメラが回らなかったり、スイッチが作動しても吹雪の中でなにも映っていなかったり、カメラが別の雪崩でとばされてしまったり……。気象観測用に気軽に置いた古典的なアネロイド気圧計の記録紙に、ホウ通過時に発生する異常な気圧降下が記録されていたり（これは世界でも初めての記録だった）……禍福はあざなえる縄の如く現われて我々を一喜一憂させたが、研究成果は少しずつ蓄められていった。

2. 雪崩事故の追跡調査と真説高熱隧道

観測初期、えたいの知れぬホウの姿の模索時代に、（雪崩災害の様子には、雪崩本体の一断面が反映されている筈ではないか……）と考えた。この立場からすれば、過去の事故記録も科学的な意味を帯びてくる。ただし、その記録は事実を正しく伝えるものでなくてはならぬ。

調べてみると、志合谷、阿曾原谷の雪崩事故については、富山市の佐藤工業本社に多量の記録や資料が残されていたが、終戦直前の空襲で焼失してしまったという。地元の口伝はいろいろ聞くことができ、それはそれで興味深い資料であったが、中に含まれる事実と誇張／虚構の区別が困難で、そのまま記録として取り扱うには問題があった。

そこで私は中川先生にご相談して、三十数年前の雪崩事故の追跡調査をもう一度、我々の手でやってみることにした。結果は口伝の確認の域を出ないことになるかも知れないが、とにかく自分自身で確かめなかった。そのためにはまず、事故の生き残りの人や、直接の関係者を探しだして証言を集めなければならない。始めてみると、これは予想以上に難しい作業だった。

まず、名前も判らぬ三十数年前の出来事の体験者をどうやって探しだすか？この雲をつかむような話は、どこから手をつけたらよいか見当もつかず、時間だけが経っていった。ある日ふと、小説「高熱隧道」のあとがきに大橋康次という名前をみつけた。（もしや……？）とお尋ねしてみると、果たして北海道電力副社長（当時）の大橋さんだった。大橋さんは昭和12年に北大工学部を卒業され、入社された日本電力の勤務地が黒部川第3発電所建設工事現場であり、最初の冬に志合谷の雪崩事故が発生したというお話だった。大橋さんは宇奈月勤務で、雪崩事故現場にはいらっしやらなかった由だったが、当時のお話をいろいろ伺うことができ、当時の現場責任者（主に東京在住）の方々を教えてくださいました。また、大橋さんが編集されたという黒三発電所建設工事の記録映画「黒部を拓く」（16ミリ映画）を見せて頂いたが、これは迫力のある記録だった。

しばらくして大橋さんから電話を頂いた。それは「志合谷の生き残りが、北海道にいましたよ。」という驚くべきご連絡だった。この人が証人第1号の山本藤養さん(富山県・礪波町出身:北海道砂川市在住)だった。山本さんは雪崩遭難当時、佐藤組の志合谷現場主任だった由で、早速、ひと月後の黒部冬期入山の時同行して下さることになった。

志合谷の宿舎跡に立った時、嘗て何処に何があって、それがどうなったか……といったような生々しい話が聞けるものと我々は期待していた。しかし山本さんは、何かぶつぶつ独り言をいいながら、あちこちと歩き回ったり、首をかしげたりして中々話をしてくれなかった。大分してから、「どうも可怪しい。私の記憶とうまく合いません……。」と言われ、我々は拍子ぬけした。

しかし暫らくして、現在の志合谷宿舎跡は、黒四発電所建設工事の時に新黒三発電所の水路隧道構築作業用に鉄筋コンクリート造りに改築されたものであり、黒三建設の時とはすっかり趣を異にしていることが判った。このことで、山本さんはいい加減なことを言う人ではないということが逆に立証された。山本さんは雪崩事故当夜は、阿曾原合宿での会議(一説にはバクチ)で志合谷には不在であった由だったが、事故前後の状況、ご自分が監督施工された宿舎の状況などのお話は十分納得の行くものであった。

これがきっかけとなり、或いは別の偶然から、その年(昭48)は多くの人たちから、いろいろな証言を聞くことができた。志合谷の事故発生直後、行方不明の義兄を探してロープで谷に降り、負傷者を救い上げた上田五一郎さん。上田さんはその後発見された義兄の遺体を曳いて下山した。当時17才の少年で、親方の命令でコンプレッサーの夜勤を続けていて難を免れ、倒壊した宿舎から炊事係の少女を救出した戸出喜久三さん。阿曾原合宿で夜勤明けの就寝中、ホウでつぶされた建物にはさまれ、身動きできずにいたところを救けられた山田六郎さん。鍛冶場で一旦ホウに埋められた後、自力脱出して山田の六さんを救けだした石丸与一郎さん。厳冬の黒部峡谷を、人間業とは思えぬ行動で、孤立していたオリオ谷の雪崩負傷者を救出した佐々木与左エ門さん……など、特異な証言者が居り、その数は11人に達した。

一人見つければあとはイモづる式にという考えは甘く、せっかく教えて頂いた生き残りの人も、お訪ねしてみると既に亡き人もあり、消息不明の場合もあって、証人人脈はなかなか繋がらなかった。

この作業を根気よく続け、また証言範囲を黒三事故からホウ一般に拡張したため、証人の数も30人を越した。一回しか会えなかった人もいたし、黒部に入る度に会う人も居り、興味深い証言がだんだん集まってきた。

この間、質問は誘導的にならないように単純な設問だけにし、私は専ら聞き役にまわった。特に初めての証言者には、他の人の証言内容は一切話さなかった。証言は毎回メモ(後には録

音テープ) からカードに整理したが、科学常識的な修正は一切加えず、証言そのものを記録した。

証人には、往時の気性の激しさを今なお感じさせる人、穏やかな語り口の人、口数の極く少ない人……など、さまざまなタイプの人々がいたが、その証言に共通していたのは（知っていること）と（知らないこと）の区別が明確なことだった。（知らないこと）については、聞き手が拍子抜けする程あっさりと「知らない」「わからない」という返事が返ってきた。また（知っていること）については、話の内容が恐ろしく克明になり、違った情報に対しては「オレは、そこに住んでいたから知っているんだ」と、いつもの温厚な口から、思わぬ強い言葉が返ってくることもあった。これらのせいか、実際の体験者の証言には話術とは別物の「力」があった。

例えば、上田さん（志合谷）の遺体運搬の話は克明を極めた。

「遭難の日の夕方、義兄 蔦オヤジの遺体を倒れたコンクリート壁の下から収容した。翌朝、十幾つかの遺体と一緒に下山した。堅坑上部駅までは貨車（軌道隧道）で運び、エレベーターで樺平に降ろした。遺体は布団に包んで波トタンで巻き、芯木を添えて番線（焼きなました針金）で捲いて担ぐようにした。前には曳き綱をつけて、ひとつの遺体に七人位ついた。その晩は猫又まで下り、一泊して検死を受け、次の日に宇奈月まで下りた。宇奈月のすぐ上の1号トンネルの中で遺体を棺桶に移し、遺族に引き渡した。」

「教えられてお訪ねした生き残りの人達にまじって、雪崩の話をよく知っているという人がいた。伺ってみると、この人自身は雪崩を見た経験もなく、ひとから聞いた話を巧みにつなぎあわせて話しているに過ぎないことが、何故か間もなく判ってしまった。話し方は滑らかだったが、話に「力」が全く感じられなかった。その人は、何を質問しても決して（知らない）とは言わなかった。十分間ほどで、中川先生と私はそこを辞した。道に出た途端、「この話はだめですね」と、全く同じ言葉が二人の口から同時に洩れた。」

ところが、営々と集めたこれらの証言の内容は必ずしも一本の線上にきちんとは並ばなかった。やはり35年の歳月は、体験者の記憶に影響を与えずには置かなかったのである。しかし根気よく調べてみると、誤った証言は必ず単数で現われ、正しい証言は複数で現われることが多いのに気がついた。互いに面識のない2人の証言が一致したり、微妙に繋がっているのに出会った時は興奮を感じた。

そしてこんな立場からこれらの証言を整理してみると、驚いたことに、出来事の大筋が自然に浮き上がって来た。大きく食い違って選択に困っていた証言も、あるものはその大筋に無理なくはまりこみ、残りは遊離していった。

体験者の証言が数多く集まれば、この方法によって主観性の強い証言や、誤った証言は自然に消去され、多くの人が体験した客観的な事実が残るように思われた。証言して下さった方々

表1：黒部峡谷雪崩災害についての証言者

雪崩事故発生場所 [発生年月日]	証 言 者	事故当時の所属：（日）日本電力，（関）関西電力 （佐）佐藤組／佐藤工業，（大）大林組，（朝）朝倉組， （喜）喜田組，
うど谷 [昭和11・2・20]	・大橋康次（日） ・滝林（佐） ・戸出喜久三（佐） ・中村忠夫（大） ・山田六郎（佐）	[5名]
オリオ谷 [昭和13・1]	・佐々木与左エ門（朝） ・宮嶋治男（佐）	[2名]
志合谷 [昭和13・12・27]	・石丸与一郎（佐） ・上田五一郎（喜） ・上野倫宗（佐） ・金鍾旭（喜／父） ・佐々木与左エ門（朝） ・竹端庄造（左） ・葛治（喜／父） ・戸出喜久三（佐） ・富永重雄（喜） ・増井新一（佐） ・真弓克巳（日） ・宮嶋治男（佐） ・山田六郎（佐） ・山本辰郎（喜） ・山本藤養（佐） ・山森正雄（喜）	[16名]
阿曾原 [昭和15・1・9]	・青海宣一（日） ・石丸与一郎（佐） ・佐々木与左エ門（朝） ・高木天（日） ・竹山健助（日） ・竹端庄造（佐） ・戸出喜久三（佐） ・富永重雄（喜） ・増井新一（佐） ・松平源蔵（日） ・宮嶋治男（佐） ・八木武吉（日） ・山田六郎（佐） ・山本辰郎（喜）	[14名]
猫又 [昭和31・2・10]	・西中森一（関） ・柳原千代（関）	
人見平 [昭和41・1・6]	・竹山健助（関） ・西中森一（関） ・宮本猛雄（関）	

を（表1）にまとめておく。

そこでこの証言結果に、我々の雪崩観測結果の考察を加えて、オリオ谷、志合谷、阿曾原谷の雪崩事故や、それに関連した出来事を再現してみた。その内容は吉村氏の「高熱隧道」に記述されたものとは、いろいろな点で食い違ったものとなった。

一日、私は吉村氏を私邸に訪ね、このことについてかなり突っ込んだ話をした。しかし高熱隧道の「記述」と、証言による「出来事」の食い違いは、二人の間で最後までそのまま埋まらずに残った。その要点を（表2）に示す。

毎年10月には、冬の観測の準備のために黒部峡谷に入山した。紅葉の季節である。水平歩道付近で作業をしているとハイカーや登山者がよく通った。そして此処にやって来る人には「高熱隧道」の読者が多くらしく、よく高熱隧道の雪崩事故の話をしているのに出逢った。吉村氏の作品が独特の作風をもったいわゆる「実録もの」であり、この「高熱隧道」には「記録文学」の名が冠せられていたから、一般読者がその記述を「信じ難いような、劇的な事実」として受け取ったのは当たり前のことと言えよう。そんな時、すこし大人気ないと思いながら、「いや、それは間違いで、実際は……」などと自分の調べたことを話した。そして、ベストセラー作家の威力を改めて感じ、これはこの事実を何かの形で残して置かねばならぬと思った。

表2：「高熱隧」の記述(吉村)と、生存者の証言・実地調査(清水)の比較。

	「高 熱 隧 道」 吉村昭	「証 言・実 地 調 査」 清水弘
う ど 谷	1. 2. 記述なし。	1. ホウはうど谷鉄橋を黒部川対岸の原生林の中に吹き飛ばした。 2. ホウはうど谷右岸尾根上の合宿（一階は半地下の木造三階建）の二、三階を吹き飛ばした。屋根は吹き飛ばされずに二階の床に落下した。二階で就寝中だった十人のうち、梁の下敷きになって一人即死、一人重傷だったが、残りの八人は無傷であった。（グルマ落とし型災害）
オ リ オ 谷	3. 雪崩によって起こった風圧が坑口から入り込んでトロッコを坑内の奥に向かって暴走させた。 4. オリオ谷の負傷者救出隊は志合谷まで水平歩道を辿った。そこから上流のルートは不記述。往路3日、復路4日の計7日間を要した。 途中、負傷者は思いきり殴られたり、二度ほど捨てられかかった。	3. トロッコは吸い出されるように坑内を出口に向かって自走した。 4. 救出隊のリーダーは佐々木与左エ門。朝、樺平を出発して、エレベーター、上部軌道を利用して志合谷着。ズリ出し坑口から外に出て急斜面をトラバース、夕方オリオ谷合宿到着。翌日は逆コースを辿り、2日間で救出完了。途中、殴るとか、捨てかかるとかは事実無根。 [冬の水平歩道は、猟師も通行不可能]
志 合 谷	5. 爆風は宿舎の2階から上部をきれいに引き裂いて、比高78mの山を越え、宿舎地点から580mの距離にあたる奥鐘山の犬岸壁にたたきつけた。途中で破片らしきものが何も発見されないとところから、宿舎はそのままの形で深夜の空を運ばれたと想像された。 6. 坑口から宿舎位置まで雪道が作られはじめた。 宿舎位置後方に、大量の雪崩れた雪の堆積ができています。崩壊した三階以上の建物は、その中に砕けて埋もれているにちがいない。 7. 藤平たちはカンジキをはいて坑口をはなれた。宿舎地点からのゆるい傾斜をくだると雪が急に深くなり、迂回ぎみに山に近付いていった。かれらは、蛇行しながら山の傾斜を登った。	5. 合宿上部は雪崩に打ち砕かれ、就寝中の人と共に志合谷～対岸尾根に飛散した。合宿下部はその場に倒壊し、死傷者を出した。隣接の喜田組事務所ではコンクリート壁が倒れ、1名圧死。奥鐘山の岩壁の方向では、対岸尾根(山)は宿舎位置と同じ高さか、それより低い。尾根の比高78mの場所は岩壁より遙かに左に外れて居る。 6. 宿舎は坑口に直結して建てられた。 また宿舎位置後方は傾斜70度、深さ40m以上の崖（志合谷）になっている。 従って現場は、雪道を造る距離もないし、宿舎位置後方に雪の堆積する場所もない。 7. 宿舎地点から谷に降りる傾斜は70度、40mの崖でロープなしには行動できない。 蛇行しながら登った山（対岸尾根）の志合谷側は絶壁で、通常の登高は全く不可能。

（志合谷）	8. 一月十日には宿舎一階を覆う雪の除去もほぼ終了して遺体の所在がさぐられた。・・・遺体もその場所からは一体も発見されずに終わった。・・・五階建ての鉄筋コンクリート宿舎は、一階を残しただけでその内部の人間84人と共に完全に姿を消してしまったのだ。 9. (2月下旬) 奥鐘山の大岩壁の根元の広い岩棚の上に、砕けたコンクリートの残骸が重なり合い、遺骸らしいものも幾つか見えた。 三月に入ると・・・融雪が本格化して、岩棚から遺体も雪の塊とともに水の中に滑り落ち・・・初めての遺体は小屋平ダムの貯水湖で収容された。 ・・・・・・ 人夫たちに、長い丸木を溪流（黒部本流）の岸に運ばせそれを対岸（奥鐘山岸壁）に渡した。その日から遺体の収容作業がはじまった。 第一日目の作業で十八体の遺体がトタン板にのせられて雪の上を志合谷に運ばれた。 10. 奥鐘山の岩壁に大きな亀裂がおびただしく走っているのを見た。それは途中で宿舎が分解せず、大岩壁に激突したことをしめしていた。 11. 泡雪崩は宿舎建設地点の北東七〇〇米の峻嶒な山の傾斜で発生した…。宿舎は直線的に南西方向に吹きとばされた。 12. 八十四名の遺体は、奇蹟的にも一体残らず収容された。	8. 事故当日（12月27日）36名の遺体が収容され、29日までに宇奈月に搬下、30日に合同葬儀が行なわれた。 志合谷宿舎は合掌造りの木造四階建。側壁のみ1 m厚の無筋コンクリート。[これまでに鉄筋コンクリートの構造物がホウに破壊された例なし。] 9. このような事実なし。 この時期に、この場所でこのような行動は不可能である。 10. 岩壁の大亀裂群（西壁のオーバーハング群）は岩壁の層理構造によるもので、宿舎の衝突などで出来るものではない。 11. 雪崩が発生した志合谷は宿舎地点から西南西方向に延び、その沢頭は南西約1.5kmである…。宿舎は殆ど北に飛ばされた。 12. その後も遺体は分散的に発見収容されたが、現在なお宇奈月町出身者だけでも20人を越す行方不明者（山田六郎の兄をはじめ）があり、金鐘旭の父、末弟ほか相当数の不明者がいる。
阿曾原	13. どの部屋にも廊下にも、上方から殆ど垂直に、太い樹木が刺し貫いている。撫は矢の群のののように空中に舞い上がり、宿舎めがけて突き刺さってきたにちがいがなかった。	13. このような事実はなかった。 宿舎のすぐ上にあった三抱えほどのブナの巨木は、オヤ木として営林署の伐採許可がおりなかった。これが横に倒れて、宿舎の屋根を叩きつぶす形になっていた。

そこで改めて「高熱隧道」を読み直し、証言事実と食い違った記述のある頁をすべてコピーにとり、「どの記述」が、証言事実と「どのように違うか」を克明に書き込んだ。これを原稿として、総頁 38 頁の手造りのコピーパンフレットを作って「真説高熱隧道」という名前をつけた。新しい証言があった時は、それを書き込んで新版原稿とした。第 1 号を作ってから北大定年退官までの 15～6 年間にこの「真説高熱隧道」は 300 冊位は作ってその折々の人に上げたように思うが、その数ははっきりしない。

思いがけない形で証言が出て来たこともあった。真弓克巳さんは大橋康次さんの日電同期生で、昭和 12 年に入社され、猫又発電所（黒二）に勤務された。王朝文学の造詣深く、その文才は同期生のなかでも評判の方だったそうである。真弓さんは後年、「やまみち」という随筆集を出版された。その中に“黒二の楓”という作品がある。

「鼠返しの大岩壁を過ぎるとなつかしい黒二。まっ白な建物がやや汚れているのはちょっと残念。昭和 13 年の初夏、初めて着任した配電盤室、勝手知ったふるさととばかり、エレベーターで上ってみる。

（中略）

当時、黒三は工事中。その冬、大雪崩で多数の犠牲者が出た。遺体を運ぶ提灯の灯が対岸の闇の中にゆらゆらと、まるで幽鬼の列のように思えて息をのんで見つめていたこの部屋……。

（中略）

——そして今、私はここにいる。」

後日、この随筆集に一通の手紙がそえられて大橋康次さんに送られて来た。手紙には、「最近「高熱隧道」を読む機会があって、黒部の風景描写が美事でひとしお懐かしく読みました。そのあとがきに貴下の名を見出し、一点だけ疑問に思う点がありますので御教示願いたく……」

とあり、黒二の楓の記述に触れていた。文中の大雪崩は志合谷の惨事を指し、その時自分は入営直前で黒二にいた。「高熱隧道」によれば、志合谷遭難の遺体が発見されたのは、翌昭和 16 年 3 月以降となって居り、自分はもう入営して黒二にはいなかった。自分が、（遺体を運ぶ提灯の灯が……）と書いたのは、実は負傷者だったのか？それとも吉村氏は、三か月間遺体未発見……とドラマチックに書かれたのか？……と、真摯な質問の趣旨だった。

この随筆集と手紙が大橋さんから私に回されてきた。私は早速、「真説高熱隧道」をまた作って、大橋さんから真弓さんに送っていただいた。（この中には、上田五一郎さんの遺体搬下と猫又検死のことも勿論書いてあった。）間もなく、真弓さんから大橋さんを通じてお礼状が来た。（事情が日付と共に明瞭になってほんとうに嬉しかった。いくら寝言のような随筆集であっても、事実誤記はエンジニアの恥と思ったからのことで……どうか清水先生にくれぐれもお礼を

……)

何年かしてお会いしてみると、真弓さんは気さくな方であった。私も人見知りしない方であるのに、何故か初めの頃は大橋さんを介しての妙な通信形式であった。なにか、はにかみがあったのかもしれない。

3. 新聞報道記事

証言の真実性などについていろいろ考えていると、黒部川第三発電所建設工事の雪崩事故が、当時どのように報道されたか？また、報道内容にどんな情報が含まれていたか？……等はすこぶる興味深い問題に思われてきた。

しかし、富山市は太平洋戦争終結直前に空襲をうけて多くのものが焼失したため、戦前の地元新聞の閲覧等もそう易しいことではなかった。幸運にも、この面倒な作業を引き受けてくださる方が現われ、富山市の県立図書館にある古い（約半世紀前の）新聞を丹念に調べて、関係記事所載ページをマイクロフィルムからコピーして送って下さった。

昭和60年の正月は、私はそれらを調べて過ごした。送られてきたコピーは富山日報、北陸日日新聞、北陸タイムス、高岡新聞の四紙のもので、12月28日（志合谷事故の翌日）から31日までが大部分で、1月に入ってからのもを含めて合計22枚あった。マイクロフィルムからの複写はコントラストが強く、細い線が屢々消えてしまったため、これを読む作業は解読と言ってもいい位だったが楽しい仕事だった。

ひと口に言って、志合谷事故についての報道記事は各紙ばらばらだった。例えば、第1次救援隊の人数について一紙は800人、他紙は300人、或いは30人と報じていた。また、死者＋不明者＋負傷者＋生存者＝全居住者数が成立していなかったり、統計の縦、横の和が合わなかったり、それが新聞によって違ったり、日によってまた変わったりした。数字、人名、地名の正確な記述などは、拙速を旨とする新聞のアキレス腱かかもしれないと思った。中には、三紙が「34～36人の遺体が収容されて、宇奈月町に下山した」と報じている日に一紙だけが「死体は全部発掘、けさ現場で火葬す」などと書いていることもあった。

そこで、横軸に新聞名、縦軸に日付の表を作り、日付別の出来事として、各紙の報道記事をそのまま書き込んだ（表3）。それから全体を眺めて、二紙以上に共通して現われた出来事の記事を最後の欄にまとめてみた。そうすると、個々の人名、地名、数字は正確には特定できないが、ごく自然と思われる出来事の流れが浮き上がってきた。これは以前試みた証言の整理と類似の方法であり、興味深い結果だった。これを見ると、新聞は「事件の発生」をいち早く報道はするが、「事件の真相」を知るには、一紙に頼ることは避けたほうが良いようである。

整理結果を、以下に辿ってみよう。〔() 内の時間と人数を示す数字は不明確。〕

昭和 13 年 12 月 27 日

〔志合谷〕

- ・(3:20) ごろ雪崩襲来。まず屋根が飛ばされ、ついで建物倒壊。
- ・(3:40) 喜田組の山森、田島(全紙、山田・森島と誤記している)が、事故発生を宇奈月町佐藤組本部に電話連絡。(その後、電話線切断のため通信不能となる。)
- ・付近の飯場(阿曾原、樺平など)から、人夫(360人)来援。発掘作業は難航。36遺体を収容。

〔宇奈月〕

- ・佐藤組本部から三日市署に志合谷での事故発生を連絡。
- ・宇奈月派出所主幹(神保) 巡査部長は(?名)の部下と志合谷に向かう。富山県警は宇奈月町に搜索本部を設置。
- ・電話線修理作業進行。

12 月 28 日

〔志合谷〕

- ・悪天候下、搜索継続。
- ・前日収容の遺体下山開始。第1班(死2, 傷2)は、夜宇奈月町到着。第2班(死12), 第3班(死23)は猫又, 小屋平で一泊。検死は小黒部, 小屋平, 猫又, 或いは出会いの場所で行なった。
- ・搜索本部の(藤井, 相川)両課長ら, 小黒部到着。

〔宇奈月〕

- ・第1班の下山サポートのため, 人夫(200人)を動員(佐藤組)。

12 月 29 日

〔志合谷〕

- ・猛吹雪と雪崩多発のため, 搜索作業休止。
- ・(藤井, 相川)課長, 志合谷視察後, 下山。

〔宇奈月〕

- ・第2, 3班の下山サポートのため, 人夫(200人)を動員(佐藤組)。
- ・第2班(12:30), 第3班(19:30)宇奈月町到着。1号トンネル内で棺に移して, 遺族検死。県内者の遺体は遺族に渡し, 県外者は樹徳院で合同告別式。負傷者は藤田病院に収容。

表3 志谷雪崩事故(昭13.12.27)の新聞報道記事による再現の試み

[illegible]

12月30日

[志合谷]

・1週間ぶりの快晴。発掘作業再開。

[宇奈月]

・(10:00) 日電宇奈月事務所で合同葬儀。

・御内帑金、県に下賜さる。

あ と が き

昭和46年から10年間、著者は富山大学理学部・北海道大学低温科学研究所協同の黒部峡谷のホウ雪崩の研究観測に従事した。

この期間に、我々の科学調査をサポートする目的で、過去の雪崩事故の実態の追跡調査を試みた。その結果、以下のようなことが解った。

生存者の証言

生存者の証言は、原則的に信頼性が高いが、実際には、時間経過による記憶の変形や、個人的な主観・誇張の影響などもあり得るので、取扱いには注意を要する。証言が多く得られると、誤記憶や主観の強い証言は単数で現われるので消去できる。

新聞報道

新聞報道（一般に mass communication）には「拙速」の意義がある。即ち新聞（マスコミ）は、事件の発生をいち早く報らせる機能があるが、出来事の内容は必ずしも正確に伝えていない。特に数字・名前（人名、地名など）はマスコミのアキレス腱のように思える。しかし、一事件について数紙（特に、地方紙）の報道記事を総合考察すると信頼度の高い大筋が得られるようである。（従って、出来事の内容の正確さを期する場合は、一紙だけに頼るのは危険である。）

小説「高熱隧道」（吉村昭 著）

吉村氏は黒四発電所の建設工事時代（昭和30年代中頃）に、「高熱隧道」の作品化のための取材を宮嶋治男氏に試みた。[宮嶋氏は、黒三工事時代に佐藤組の工区主任今村常吉氏の秘書的な地位にあって、工事の進行について詳しかった。なお、作品中の根津太兵衛は今村氏、藤平は宮嶋氏が擬せられたと言われている。]

この時、宮嶋氏は証言の正確さを期するために、二十数名の事故生存者の名簿を吉村氏に渡し、

- ・まず、吉村氏が個別訪問による取材をする、
- ・個別取材終了後、生存者懇談会（吉村氏同席）を宮嶋氏が開催し、証言の正誤を整理してから執筆にかかる、

ことを約した。しかし、吉村氏は名簿中の若干名に会っただけで、「高熱隧道」を書き上げて出版してしまった。宮嶋氏は違約を激怒し、誤記述と虚構を数々指摘した。

また著者（清水）の現地調査および生存者証言の結果からも、吉村氏の「高熱隧道」は「記録文学」と称されているにも拘らず、その作品内容には誤った記述や虚構が多く含まれていると言わざるを得ない。

本文は、北海道大学低温科学研究所清水 弘教授（現藤女子大学講師）が、1990年2月2日開催の地区総会において行った、特別講演を加筆修正して取りまとめたものである。